報恩講とは、

親鸞さまのご法事のことで、真宗では一番大事な行事です。私たちの先達により、七〇〇年以上にわたり、ひと世代ひと世代、大切に伝えられてきました。しかし核家族化のせいでしょうか、ご両親はあんなに大事にされていたのに、次の世代になると全くご存じないという方が増えはじめています

初めて聞いた

という方も、どうか「温故知新（古きを温ねて新しきを知る）」の精神で、先達やご先祖が大切に伝えてこられた事を体験してみて下さい。それは「クリスマスをしないキリスト教徒」ぐらいに真宗では大切なことなのです。

木を見て森を見ず

すぐそこに大きな森があるのですが、そのことをお伝えできない力不足を恥じ入るばかりです。どうか「葬式・法事だけでいい」と言われずに、通り報恩講や法座にご縁を結んで下さい。きっと、大きくて静かな森（仏さま）の世界が開けてくるはずです。

はじめての人 ベテランの人 の 報恩講ガイド

（二〇一三年度版）

通り報恩講（詳しくは次頁をご覧下さい。）について、

都合が悪い方

お仕事などで、ご案内の日時にご都合がつかない方は、別の日時にお参りさせていただいています。ご遠慮なくご相談下さい。また逆に、その時間に合わせて帰宅するので、コース表通りの時間でなければ困るという方も、失礼があってはいけませんのでお寺までお知らせ下さい。

ご理解とご協力を

時間厳守を心がけておりますが、臨終勤行（枕経）やお葬式ができた場合は、誠に恐縮ですが、変更にご協力下さい。

また、変更する場合は、事前にご連絡いたしますが、お家の都合などで急な変更があった場合や、深刻な相談があった場合、どうしても多少時間が前後することがあります。どうぞご協力賜りますようお願い申し上げます。

報恩講は三つある

まず、各ご家庭でつとめる「通り報恩講」。西教寺では、例年十月一日（土日祝日休み）よりはじまります。お寺の近くは、こちらで日時を指定させていただき、一軒三〇分目安でお参りします。遠隔地の方や事情がおありの方は、日程等相談してお参りさせて頂いています。ほとんどのご門徒がつとめられます。

次に、お寺での「お取り越し報恩講法座」。親鸞聖人のご命日（一月十六日）をご本山以外の各寺院は取り越してつとめます。ご門徒の皆さん、「年に一度、報恩講だけはお寺参をりする」ということにしてくださいね。

そして最期に、一月十六の親鸞さまのご命日、ご本山（西本願寺）では「ご正当（御正忌）報恩講」がつとまります（九日～十六日）。ご門徒なら、一生に一度ははご本山にお参りしたいものです。しかし、本山へ参詣できない人のために、ご法義の厚い（信仰の盛んな）安芸地方では、各寺院でもご正当の法座を行っております。

おとりこし報恩講法座

三津田支坊　11月13日～15日

蔵本通支坊　11月25日～28日

長ノ木本坊　12月13日～16日

報恩講の意義

報恩講は、真宗門徒にとって特別な意味をもつ行事です。今まで仏法にご縁の遠かった方は、お寺というと、「先祖の葬式と法事をするところ」というイメージかもしれません。しかし、お釈迦さまの説かれた仏法、また親鸞さまの教えは、人生のさまざまな苦悩や悲しみを乗り越え、心の安らぎをえて、実りある人生を教えるものです。真宗では、そのように人生に眼をひらかれることを「信心を決定する」といい、毎月お寺で開かれている法座（お聴聞）は、そのためのものです。また、蓮如さん（本願寺八代門主）は、

未安心の行者にいたりては（略）この砌（みぎり）において仏法の信・不信をあひたづねてこれを聴聞してまことの信心を決定すべくんば、真実真実、聖人（親鸞）報謝の懇志にあひかなふべきものなり。

（『御俗姓』『浄土真宗聖典註釈版』1223頁）

と言われ、私たち一人一人が信心を決定すること、つまり人生の本当の意味に眼を開かれ、一時しのぎではない本当の心の安らぎを得ることこそが、親鸞さまのご恩に報いること「報恩」になるのだと仰有っています。

その意味では、西教寺の報恩講は、まことにお恥ずかしい、形ばかりの報恩講ですが、少しでも本来化・現代化して、「心の安らぎ」、新しい人生への「めざめ」、そして「出会い」の場となるよう、僧侶・門徒どもども背筋を正してお迎えしたいと思います。

また既に、私は大きな宝物をもらった、これが私に届けられるまでにはどれほどのご苦労やお手間があっただろうと感じている皆さん、危機的状況ですが、少しでも仏法が弘まるよう、また世の中が安穏になるよう、できるところでご報謝をお願いします。ご家族ご友人など、一人でも多くの方を誘ってご縁におあい下さいね。

お仏壇の準備

何はともあれ、通り報恩講は、お仏壇のご準備から。報恩講は、昔から、「おみがき」といってお仏壇を大掃除してお迎えするのが慣わしです。

おみがき（お掃除）

めっきしていないしんちゅう製の輪燈（りんとう）・おリン・仏飯器などは、仏壇店などで売っているしんちゅう磨（みが）きなどで磨きます。家族みんなでおみがきしましょう。

おかざり

〈お　花〉

まごころをお供えするのですから、造花はご法度（はっと）です。

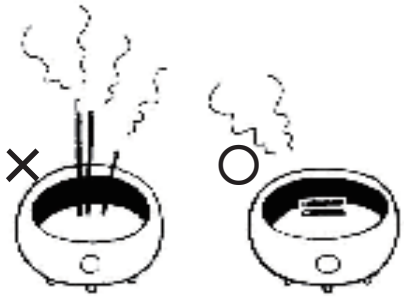
〈ローソク〉

普段横着して電気のローソクだけの人も、この日は本物のお光りをともしましょう。新しい

のを出しておいて下さい。できれば、朱ロウ（赤いローソク）で。マッチと灰皿をお忘れなく。

〈お　香〉

　できるだけ良い香りのものにしましょう。香炉は灰をならしておきましょう。マッチの燃えカスは香炉ではなく灰皿に入れるようにしましょう。



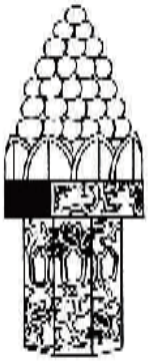
線香は立てずにねかせます

〈お仏飯〉

　これがなければ始まりません。両脇掛け（親鸞さま・蓮如さま）にもお忘れなく。

〈お供え物〉

　報恩講などの法要仏事の際は、お仏飯の他、お餅やお菓子等を適宜お供えします。お供えする順番は①「餅」②「菓子」③「果物」の順です。また、お供えは、供笥（華足ともいう）や高杯に盛りますが、この辺で多い三方向が金濃（金色）、残りの三方向が黒の供笥は、金が正面に来るよう（黒が見えないように）します。



⇒ 裏側（黒塗りの部分）が出ないようにします。

ちなみに、仏さまと、ご先祖とを混同しておられる方も少なくないようです。仏さまにはお水・お茶・コーヒー・お酒・たばこ等はお供えしません。

×

　亡き人とお話ししたり、涙を流したりするのも、また、その他さまざまな人生の苦悩も、仏さまとともに受け止めるならば、五里霧中をさまよっていても、必ず光が差してまいります。お仏壇は大切なことを私に見せて下さる場です。

御　文　章

　「出し忘れ」をしたり、向きが「上下逆」になっているのが御文章。お持ちでない方は、お寺にご相談下さい。ちなみに、法事の「お仏前」やお花、仏具など、お供えは皆、私たちの方向にを向けるのが作法です。お供えは、私が仏さまに向けて供えたつもりでも、実は備えさせてくださっている（私の仏心は実は仏のはたらき＝おかげ）の世界を表しているそうです。

こちら（上側）が仏さま側

お焼香道具

　香炉を乗せるお盆・抹香（粉のお香）を忘れずに。

お念珠・お経の本

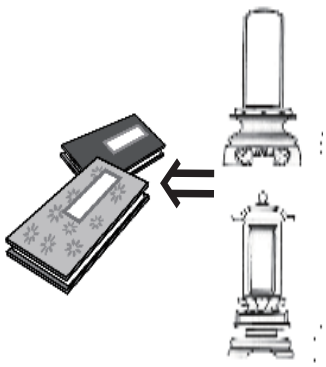
　お念珠、お経の本を忘れずに。また、大切な物では直接地面に置かないよう気をつけましょう。

おつとめ

　お経はいっしょについてあげます。老眼鏡を忘れずに。数年前から、お正信偈も少しはゆっくりになったと思いますので、できるだけ多く方を誘ってご縁にお会い下さい。

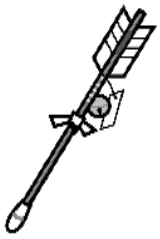
お位牌は過去帳に

　真宗はお位牌は用いません。過去帳に書き換えましょう。お寺の者にご相談下さい。



真宗門徒の生き方

　時々お参り先で、お守り・破魔矢・お札・神棚・他宗の本尊など見かけます。このほか、日の善し悪しや方角、墓相・家相、その他さまざまな縁起かつぎや、運気が上がるといわれる壺や印鑑など、気になっている方もいらっしゃるようです。私はそれを決して、「けしからん」とか「つまらん」と言っているのではなくて、そのために遠くまでお参りに行かなくても「身近にすばらしい教えがありますよ」とお伝えしたいのです。



いらなくなります

どう生きるのか

昨年西教寺にお招きした亀井鑛（かめいひろし）先生は、真宗大谷派のお寺のご門徒で聞法歴五十年、NHKテレビ「心の時代」で随時司会もされています。先生は、「これは、真宗門徒だからとか、宗派の掟として、昔からそういわれているから、そう教えられているから、というんでなく、そもそも人間が生きる上で、これをどう受けとめていったらいいかという問題です。」（亀井鑛著『妙好人と生きる』）といわれます。家族が健康で長生き、仕事も順調等々、幸福を願うのは、私たちの素朴な願いです。それをかなえるために私たちはさまざまに努力しますが、思い通りにはなりませんね。そこを神さまにかなえてもらうべく祈願するわけですが、はたしてそれで思いはかなうのでしょうか。また、本気で信じてはいないと言いつつ、お札やお守りを手放せない皆さん、ここが仏法の聞きどころです。

道理に気づく

亀井先生いわく。「仏様も、人間の側から仏様に向かって・拝んで祈ってすがって手を合わすと、願い事がかなえてもらえるのか。そうじゃないですね。仏様は向こうから私たち人間に向かって、「お前たちの生き方はまちがっている。法に背き道理に違う。それに気付いてくれよ」と呼びかけ、願いかけてくださっている。それ本願という。」（略）。「真の宗教は、迷信に対する正信です。本願念仏は正信でしたね。それは道理の宗教といっていい。道理にのっとり、道理にかなったあり方に私たちを導く。」

（亀井前掲書）

道理（法・み教え）を聞けば、私の生き方・願いの底にある無明性（真実に明るくないこと）煩悩性（自己中心性）に気づかさます。そして本当の生き方が見えてきます。

地獄の苦しみを背負うて立つ力

喜多繁子さんさんは、ある新興宗教を信仰していた（亀井鑛著『われら念仏に生きる』より引用）。二人目の子が生まれたころ、夫の武弘さん（51歳）が病気になった。病気を治すために、お内仏の前（在来の家の宗旨はそのままでよいという教えだった）でその教団の聖典を、時間を決めて読経のように読誦した。一生懸命に信仰したが、結局〝効能〟はあらわれなかった。「どうしてなの。これだけやっても、どうして夫の病が治らないの」と焦りと疑いがよぎりはじめたとき、手次ぎ寺の慈光寺一後藤道照住職一からもらった「法語カレンダー」（真宗教団連合刊）の「地獄の苦しみを背負うて立つ力を信心という」ということばが、繁子さんの目に入った。

「本当に、もうどうにもならなかったのです。その状態を背負って立つ力が信心なのか、と。私もその教団で信心していたつもりだったのですよ、苦しい境遇を変えてもらいたい一心で。そうだったか、苦しみを受けとめて背負うということが信心だったか。このことばひとつで、私はその教団から切れました。あのことばに出遇わなかったら、今でもつっぱってやっていたでしょうね。」

皆さん、ちょっと仏法を聞いてみませんか？

目からウロコのおとりこし報恩講法座

〔朝席〕8 時 30 分～ 10 時 30 分　〔昼席〕13 時～ 15 時　〔夜席〕19 時 30 分～ 21 時
参加費（ご法礼）はお気持ち（喜捨）。本堂内の帳場さんへお願いします

三津田支坊　11月13日（水）夜席～15日（金）朝席

三条 4-13-7
TEL0823-21-5895

講師　本多 靜芳　先生

（東京仏教学院講師・東洋大学講師・アーユス仏教国際協力ネットワーク理事・東村山市万行寺住職・著書『「歎異抄」を読む』『いのち、見えるとき』他多数

蔵本通支坊　11月25日（月）夜席～28日（木）朝席〈27日（水）夜席はありません〉

中央 7-7-13
TEL0823-21-2798

講師　伊藤 智誠　先生

（大阪府和泉市太町称名寺分院長・著書『妙好人めぐりの旅』『日本人として心が豊かになる仏事とおつとめ』

長ノ木本坊　12月13日（金）夜席～16日（月）朝席〈15日（土）夜席はありません〉

長ノ木町 16-10
TEL0823-21-3714

講師　西光 義秀　先生

（元佐賀龍谷短大教授・奈良県宇陀郡満行寺住職・著書『われも六字のうちにこそ住め』）